

桂離宮

京の自然を巧みに取り込んだ 風雅なたたずまいの離宮

京都市の桂離宮は、八条宮初代智仁親王、二代智忠親王が約50年かけて造営した別荘で、江戸初期の1615(元和元)年頃に建造が開始された。宮廷文化の再興をめざしたとされる繊細で華麗な建物と庭園は今も往時の姿を良く留めている。宮内庁所管の皇室用財産。



桂川の水をたたえた池に面して最も格式の高い茶屋・松琴亭がたたずむ。石橋を渡ると水面に導く飛石があり、流れの手水と呼ばれる。右奥に書院が見える。



御舟屋。ここから舟を池にこぎ出して苑内を周遊し、桂川へ出ることもあったという。



舟が行き来できるようにアーチになり、高い位置にかけられた土橋。



笑意軒。切り石を直線的に並べた舟着場がある。建物へ伸びる2つの石段の向きをわずかに違えるなど、遊び心が随所に見られる。



古書院や月見台は中秋の名月が見る方向に向けて建てられた。(下)月見台前の池に月が映る。



松琴亭。(左) 炉や竈、水屋棚をしつらえた竈構え。庭園を眼前にして茶や簡単な料理が供された。(右上) 棚に料理を入れ、棚下の炉の熱で保温した。左に市松模様の障子・床の間が見える。(右下) 三畳台目の茶室。壁の変色は洪水による浸水の痕とされる。

窓の向こうに水田風景が広がる。窓下の壁に南蛮渡来のビロードと金箔による斬新な装飾がある。



(写真右から) 古書院、中書院、楽器の間、新御殿が雁行して建ち並ぶ。書院群が高床式で建てられたのは庭・蹴鞠などの鑑賞のためや池が近いことから通気性を良くするため。また、たびたび氾濫した桂川の水害に備えてのことでもあった。



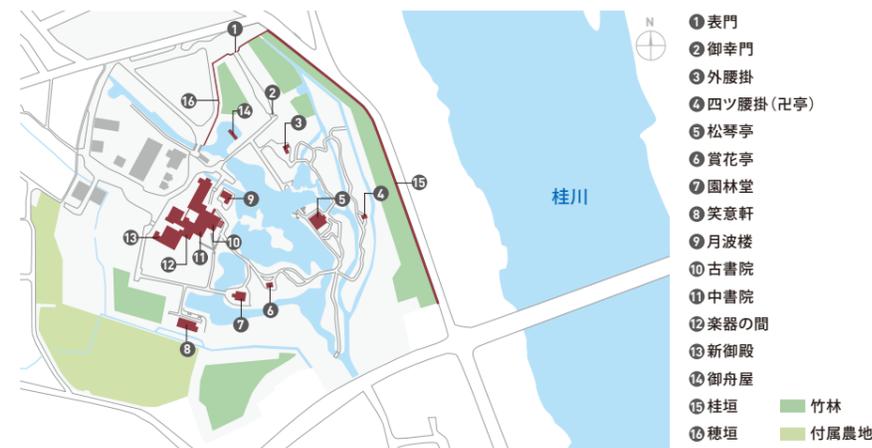
敷地東に続く桂垣はハチクを生きたまま折り曲げ、骨組みとなる垣に編み付けてある。

(下) 宮内庁京都事務所

京都市を流れる桂川の西岸、下桂の地は古くより月の名所で、平安期の公卿・藤原道長の別荘もあったと伝わる。桂離宮はその跡地に智仁親王が古書院を創建したことに始まる。続く智忠親王は古書院を接客用とし、自らの滞在用に中書院を、後水尾上皇を迎えるために新御殿・楽器の間を増築した。これらは雁行形に連なって建てられたため、どの建物からも良い眺めが得られるという。智忠親王は広大な池泉回遊式庭園に松琴亭や月波楼、賞花亭、笑意軒という数寄屋風の茶屋なども建て、1662(寛文2)年頃までには現代に見られる

姿がほぼ整った。古来、貴族は池に舟を浮かべ、月を愛でて歌を詠み、茶屋を巡って酒や茶に興じることを楽しみとした。桂離宮の苑内には桂川から引き水しており、舟着場を設けた茶屋もある。大阪土で仕上げた赤褐色の壁、むくりを付けた茅葺き屋根入母屋造りの松琴亭は最も格式の高い茶屋。庭園に面した土廂の下に竈構えをしつらえた草庵風の造りで、遠州好みの茶室である八つ窓の囲いや、一の間に見られる白色と青色の奉書紙が市松模様を描くふすま、床の間の張り付けで知られる。月波楼は化粧

屋根裏が船底天井になった茶屋。海に見立てた池越しに松琴亭が遠望でき、その上方に昇る月や水面に映る月を鑑賞するのに格好の位置である。庭園は自然の景観をさまざまに写しており、桜や藤を鑑賞するための茶屋だった賞花亭は苑内で最も高い小山にあって峠の茶屋のたたずまい、連子窓の向こうに水田が広がる笑意軒は里の風景を見せる趣向である。桂離宮は文学や学問に長け、美的感覚に優れた両親王と、遠州の影響を受けた職人たちが造りあげた。古の宮廷文化を彷彿とさせる美しい離宮は後世に受け継がれていく。



- ① 表門
 - ② 御幸門
 - ③ 外腰掛
 - ④ 四ツ腰掛(祀亭)
 - ⑤ 松琴亭
 - ⑥ 賞花亭
 - ⑦ 園林堂
 - ⑧ 笑意軒
 - ⑨ 月波楼
 - ⑩ 古書院
 - ⑪ 中書院
 - ⑫ 楽器の間
 - ⑬ 新御殿
 - ⑭ 御舟屋
 - ⑮ 桂垣
 - ⑯ 穂垣
- 竹林
■ 付属農地

用語説明

【大阪土】元は大阪府天王寺付近より採取された赤褐色の粘土質土。上質の上塗り用色土。

【遠州】江戸初期の茶人・造園家、小堀遠州。

【奉書】主人の意志を伝えるため家臣が発行する文書。

【張り付け】板に紙または布を貼った壁。

京都府京都市西京区桂御園
協力:宮内庁京都事務所

